

# 日本スポーツ社会学会会報

# Sport Sociology

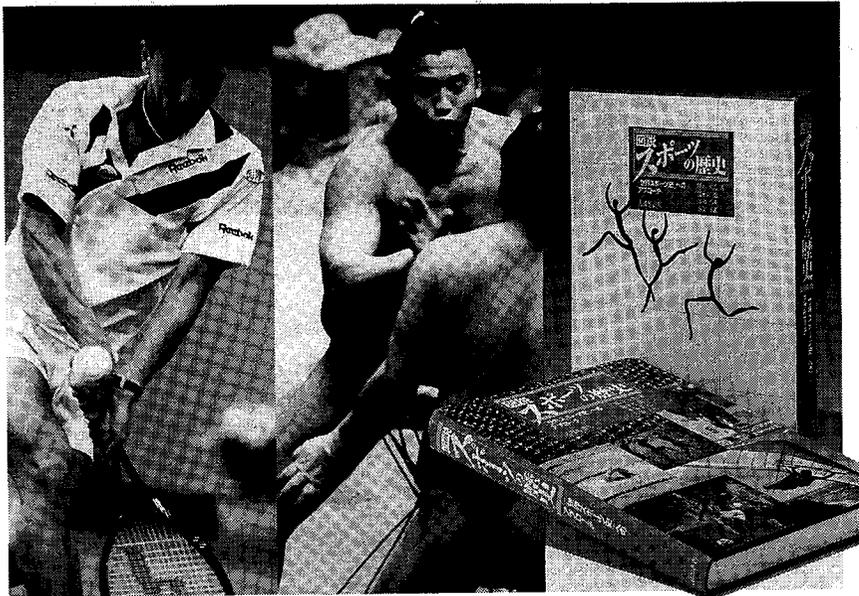
第18号

## 目次

「新理事長挨拶」	1
「新研究委員長挨拶」	1
「新編集委員長挨拶」	2
「新事務局長挨拶」	3
「第7回学会大会のご案内」	4
「ホームページの開設について」	7
「研究委員会からのお知らせ」	8
「編集委員会からのお知らせ」	10
「事務局からのお知らせ」	10
「理事会の記録」	11
「図書紹介」	12
「掲示板」	15
「新入会員/住所・所属変更/訃報」	18

日本スポーツ社会学会  
Japan Society of Sport Sociology  
事務局：奈良女子大学 1997.10

スポーツの過去・現在・未来を写真で語る



# 【図説】 オールカラー スポーツの歴史

《世界スポーツ史》へのアプローチ  
稲垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜了正[著] / フォート・キンモト[写真]

## 人間にとってスポーツとは何か 歴史的視点からその本質を問う

世界が動き、スポーツも動く。いま、なにもかもが大きく変化する時代。すなわち「後近代」の始まりである。この「後近代」の視座から民族スポーツと近代スポーツとを対比し、スポーツの「現在」と「世界性」を問う。スポーツとは何か、長い歴史のスパンからの提言。歴史的に貴重な珍しい写真、迫力ある現代スポーツの写真約700余枚によって構成された大型美麗本。



B4変型判・上製・函入・264頁  
4色刷り  
本体18,000円

【主な目次】  
序章=スポーツの編年史 / 第1章=大航海時代とそれ以降の民族スポーツ / 第2章=近代化スポーツの系譜 / 第3章=スポーツの現在 / 終章=スポーツ文化の問題状況

大修館書店

【書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください】▶Tel.03-5999-5434

## 新理事長挨拶

「能なしの弁解」

早稲田大学 宮内孝知

第Ⅲ期の理事会が、会則による連続Ⅲ期の就任が認められない故のことだと判断されますが、大幅な理事の入れ替えでスタートしたのが2年前でした。第1回理事会で決定された役割分担が、諸々のことから変更が求められ、正に晴天の霹靂のごとく理事長を仰せ付けられることになり、心底驚愕しました。業績もなく、単に馬齢を重ねてきたに過ぎない者が、学会の理事長とは何をなすべきなのかも分からない者が、何故に理事長なのか大いに悩みました。結論は、馬齢を重ねてきた故の理事長拝命なのだろうということでした。以来2年近くの間、池井前会長をはじめ、各委員会及び事務局担当の理事諸氏に支えられながら、第Ⅲ期の任期を何とか果たすことができました。その間、編集委員長の平野理事のご尽力による学会誌の市販化、伊藤前理事を中心とする研究委員会による国際シンポジウムの開催とその成功など、傍らでウロウロもできない内に過ぎ去って行きました。

しかしながら、第Ⅳ期理事選挙における重大な過誤につきましては、誠に申し訳なく、また、大きな責任を感じている次第です。はからずも第Ⅳ期理事に再任されましたが、第1回理事会の役割分担では、理事長継続が求められました。私としては、理事選挙の過誤の責任を取るためにも、また、学会の抱える諸問題解決のためにも、理事長辞退を強く申し出たにも拘らず、井上新会長の「責任を取って継続を」のお言葉で、第Ⅳ期理事長をお受けすることになりました。またまた無能さと無責任さを晒さらさねばならないことになってしまいました。

しかしながら、新会長のお言葉も、もう一度だけチャンスを与えるということでしょう。私としては、新理事会の重大な責務の一つは、学術団体としての登録であり、そのための学会体制の充実・発展であると考えております。そこに向けて微力ながら、努力する覚悟しております。

標題の「能なしの弁解」は、今でも敬愛する故多々納先生が事務局長に就任された時の挨拶と同じです（『会報』第11号）。彼は極めて有能でありましたが、私は自他ともに認める「能なし」であります。会長、理事、会員の皆様の絶大なるご指導、ご協力がなければ、その責務を全うすることはできません。どうか宜しくお願い申し上げます。以上衷心より「弁解」させていただきます、挨拶とさせていただきます。

## 新研究委員長挨拶

日本体育大学 森川貞夫

第4期の研究委員会の委員長を引き受けることになりましたが、特別の抱負というよりは、これまで「つまかさね」てきたことをきちんと受け継いでいきたいという願いでいっぱいです。できれば学会としての研究活動を組織的に考えてみたいと思っています。その手始めに「別項」のような「活動方針」(?)を提案しました。ポイントは「2.第4期日本スポーツ社会学会の研究活動の推進のために」にあります。実際にどのように展開し実現していくのか、まだはっきりしていません。したがって近いうちに会員みなさんに学会が「課題研究」および「宿題研究」として取り上げていくべきテーマをアンケート形式で聞きたいと思っております。

こうした手順を踏みながら同時にプロジェクトを起こし、学会大会毎に「中間報告」「本報告」といった形で発表(報告)と討論が組織できればと願っております。しかしそのための財政的保証や体制が未だ不明な段階ですから、できるところから徐々にスタートしていくということになります。当面はボランティア的なやり方(手弁当)にならざるをえませんが、おいおい科研費などの申請も考えていかなければならないでしょう。

いずれにしても会員のみなさんの支持がなければできないことですので、積極的な意見・提案を事務局宛にお出しください。期待しています。

## 新編集委員長挨拶

法政大学 平野秀秋

江刺正吾初代編集委員長から研究誌刊行の業務を引き継いで以来、なんとか第4、第5巻を刊行出来ました。この機会に皆様にご挨拶できるよう「会報」紙面を提供すると学会事務局のご好意がありましたので、この場を借りて会員諸氏に感謝すると共に、研究誌の現状や今後の方向などについて若干感想めいたことを申し上げます。ここから先は私見として自分言葉で申し上げますので編集委員長の肩書きは付けていないとご理解下さり、かつは「会報」のコラムのひとつという温かい目でお読み下さい。

引き継いですぐに痛感したのは、この業務が実に神経をすり減らすことでした。過日ある会員から、スポーツ社会学研究の盛んな某国の研究誌編集委員長が「編集長を引き受けたのは人生最大の誤りだった」と同会員に述べられたという話題を承りました。「いい論文が無かったらどうしようかと始終おろおろする」とこの外国の編集長は告白されたようですが、正直に申すと私も折々、特に年度のはじめは、同じ不安に悪夢のように苛まれます。締め切りを待つ編集長とは実に不安な存在だと知りました。

この不安は白紙から始められた初代編集長と編集委員会の方が深刻だったはずで、私の場合に限れば、お陰様で悪夢が現実になることはありませんでした。むしろ毎号毎号、終わってみれば確実に研究誌の内容が充実しつつあるとも感じています。創刊以来の5巻を盛り立てて下さった会員諸氏のご尽力の有り難さが身に沁みる次第です。またそんなときに、わが学会の潜在力の高さを強く感じます。私も幾つかの学会に関係しており、それらに比べて会員数こそはたしかに小さいですが、研究者集団としてのこの学会の潜在力はそれらに勝るとも劣らないと断言できます。

そのことに確信が持てたため、第4巻からは研究誌を市販に移行させました。研究活動も社会の目にさらされてこそ強くなるというときれい事になりますが、相当な冒険であったのは事実でした。池井前会長や宮内理事長のご理解がなければこれは不可能でした。しかしお二方の深い理解があり、また受けて立って下さった会員諸氏の力量のせいで、レフェリー制度を持ちかつ公衆に完全公開されている、という学会研究誌の必要条件を完備することが出来ました。数日前に理事会で学術会議への正式登録を追求する方向が確認されましたが、研究誌だけに限ればこの資格条件はすでに完全に備わっています。ウェブページに載せていただくことも実現しました。

同じ販売元から日本哲学会の『哲学雑誌』が出ています。この雑誌は、はじめ150部から出発なさったそうですが現在では数千部という発行部数を持ち、哲学のあらゆる分野の研究者と一般読者の必読誌になっているそうです。この先例が実はつぎの目標です。もちろん実現するには地道にやって十年かかるとは思っていますが。

かねがね、近代スポーツは近代社会の悪い面もよい面も数倍に拡大しつつそっくり体現している「独自の研究領域」だと感じています。まるで鏡に映したように、二つは相似形です。

近代社会がとんでもない弊害をかかえてに出発したと英国人が感じ出したころに、第一世代社会学が成立したようです。その後なお、マックス・ウェーバーやデュルケムが、やっぱり近代社会しかないのだと綱渡りのような自己説得を試みたところから、第二世代正統派(?)社会学が成立したらしいです。第三世代社会学はもう、はっきり言って米ソ冷戦と共に成立しました。そのすこし前にマンハイムという楽観的、見方によっては脳天気な社会学者が、一般社会学が成立したからには今や社会改革のための連字符社会学があっ

て当然と主張して以来、夥しい「××社会学」が出来ました。今読むと、社会的分業の上での居直りのようにさえ感じられます。

冷戦体制の中では近代社会の正統性を主張するのはどちらかという易しい仕事だったのではないかと思います。この基軸通貨体制に守られて「××社会学」はバブルも顔色を失うほど増殖しました。でもふと気づくと、「理論社会学」という連字符社会学も含めて全体に「どこか変だよな」と思う気持ちが、私はしてなりません。皆様はいかがでしょうか。

もしそうなら、これがまさしく冷戦後ということでしょう。違和感は、冷戦後の社会の在りようを冷静な見定める道を誰もが見いだせないでいる証だと思います。昨年国際シンポジウム課題の選び方にもどこか同じ判断が潜んでいたようだ、勝手に理解しています。それよりも何よりも過去三回にわたって、多くは若い会員から寄せられた投稿原稿を拝見していると、この方々が何とか方向を見いだそうと模索しておられることを強く感じます。マンハイムの楽観は空しかったようです。理論社会学からスポーツ社会学まで完全に横一線になった、これが世界の社会学の現状だと私は受け取っています。なるべくしてなったようにも思えます。

ただ、ここからしか第四世代社会学は出発しようがないことは確かです。そうなら、また先に述べた相似形の「独自の研究領域」という判断が正しければ、この領域を開拓する私たちは、第四世代社会学が足許を固めるはずのホームグラウンドにもっとも近い位置に立っていることとなります。それだけ責任は重いのかも知れません。しかし責任というなら、冷戦後の国際社会同様に、どの分野で社会学を見ているものの発言も、全体に対して対等責任の状態だと思います。第四世代社会学に結びつく何かは、考え抜かれた平易な言葉で語られるものの中にあるような気がしてなりません。

私はこの間までのモンタナとライスのプレーの狂信的ファンでした。テレビの中でパスが通ると、とにかくすかつとしてご飯がおいしかったです。そう申したところある詳しい方が、ライスが黙々と練習する姿は感動的だと教えてくれました。鳥のようにスタジアムを飛ぶこの名選手が、蟻のように黙々と練習するのだそうです。やっぱり名選手だから基礎練習に熱中できるのだなど、なんとなく納得しました。ベストは当たり前前の積み重ねから生まれるということでしょうか。

まあこの名門チームに学会を喩えるのも当たり障りがありそうですから控え目にしますが、でも先ほど申した潜在力と環境とは、やはり私たちの大きな強みだと感じるのも事実です。二代目編集長としてはそれを幸せに感じつつ、会員諸氏の活躍に必須の器である研究誌を、ちょうどスタジアムを維持・清掃する管理人の心境で次にお渡しするまでお預かりし、折々不安になりながらも皆様の活躍によって癒されるという繰り返しの日々を送ろうと思っています。どうかそれぞれのお立場でますます研究誌をご援助下さいますようお願いしつつ、ご挨拶を終えます。

## 新事務局長挨拶

奈良女子大学 江刺正吾

事務局から一言ご挨拶申し上げます。この度、1997年度と98年度の日本スポーツ学会の事務局を菊会員と共に預かることになりました。本学会は1991年3月に誕生しましたので、7年目の現在は、一人ひとりの会員が、持ち前の知的エネルギーによって、学会の創造と発展のために活動している時期といえます。学会の会員数300名弱、年間予算約150万円という規模は、決して大きな組織ではありませんが、スポーツが社

会に及ぼす影響が少なくない今日、時代を先取りしたスポーツ社会学の研究は、人類の将来に少なからず貢献をすることができると確信しています。

学会の事務局は、これまで筑波大学に4年間、九州大学に2年間置かれ、スムーズな学会活動の下支えをしていただきました。表面的には報われない地味な役割をになってくださった両大学の会員の皆さんには、敬意を表し、厚くお礼申し上げる次第です。奈良女子大学での2年間は、どれほどの仕事ができるか不透明ですが、自然体でその責を全うして、次期事務局に引き継ぎたいと思っています。

事務局の仕事は、学会活動が円滑に営まれるように、環境整備をすることかもしれません。主な仕事は、(1)年3回の『日本スポーツ社会学会会報』の発行、(2)学会費の徴収と管理、(3)機関誌『スポーツ社会学研究』の管理、(4)会員、理事あるいは各種委員会との連絡や調整、(5)外部との対応などです。これらの仕事を遂行するには、2人の理事だけでは到底無理なので、松田恵示会員あるいは院生のお手伝いを願うことになります。このところをご理解いただきまして、会費の納入や依頼原稿の提出などにご協力ください。

これは蛇足ですが、今回の事務局決定から、少しだけ述べさせて戴きます。奈良女子大学では、過去に4年間、学会の機関誌の発行に直接関与してきました。そしてまた、学会の事務局を2年間担当することになりました。今回の決定の経緯はここでは省略せざるをえませんが、学会活動が民主的に運営されるためには、学会の役割を多くの会員に担ってもらうのが最善と考えられます。今後の参考にしていただければ幸いです。ともあれ、この2年間、事務局としての仕事を全うしたいと思いますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

## 日本スポーツ社会学会第7回大会のご案内

1. 日時：1998年3月26日(木)および27日(金)

2. 場所：神戸大学発達科学部(兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11)  
交通機関：JR六甲道駅、阪急六甲駅または阪神御影駅より神戸市バス36番、鶴甲団地行きに乗車して、神戸大学発達科学部前にて下車、徒歩1分。

### 3. 日程

第1日：3月26日(木)  
12:00~13:30  
13:30~14:45  
15:00~17:00

受付、ポスターセッション、文献資料コーナー  
基調講演「21世紀の自由時間社会へ向けて」  
石森秀三(国立民族学博物館教授：観光人類学)  
公開シンポジウム「転換期のスポーツと社会」  
パネリスト 森川貞夫(日本体育大学)  
野川春夫(鹿屋体育大学)  
金光千尋(オリックス・ブルーウェーブ球団)

コーディネーター 山口泰雄(神戸大学)

17:00~18:00  
18:00~19:30  
第2日：3月27日(金)

総会  
懇親会

一般発表(A会場、B会場)

A会場「スポーツ批判」

コーディネーター 亀山佳明(龍谷大学)

B会場「スポーツと地域開発」

コーディネーター 永吉宏英(大阪体育大学)

12:40~13:30

昼食

ラウンドテーブル・セッション「スポーツ社会学教育」

コーディネーター 小椋博(香川大学)

13:30~14:30  
14:30~16:30

特別講演 マクガイヤー(ラフボロー大学)  
一般発表(A会場、B会場)

4. 大会参加、研究発表その他の申込みについて  
大会参加・研究発表申込書にご記入の上、1997年12月20日(消印有効)までに下記送付先にお送りください。なお、会場準備の都合上、懇親会の参加の有無、大会第2日目の昼食お弁当の希望(大会会場の近くに飲食店舗がありません)、文献資料の展示・販売の希望についてご記入くださるようお願いいたします。

(申込書・抄録原稿等送付先)

〒657 兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11

神戸大学発達科学部

日本スポーツ社会学会第7回大会事務局 山口研究室

5. 大会参加費その他の費用について

(1)参加費その他の費用

- ・大会参加費：5000円(学生会員は3000円、海外参加者は2000円)
- ・懇親会費：4000円(学生会員は3000円)
- ・2日目弁当代：800円

(2)振込先

申込みと同時に参加費その他の費用を同封の振込用紙によりお振り込みくださるようお願いいたします。

郵便振替

口座番号

日本スポーツ社会学会第7回事務局

6. 研究発表

(1)発表の形式

口頭による一般発表とポスターによる発表があります。発表者は、原則として日本スポーツ社会学会の会員に限ります。また、発表のためにスライド映写機、OHP、VTR、その他の機器を使用する場合には、参加・研究発表申込書の該当欄にご記入ください。当日発表資料を配布される方は、各自70部以上をご持参ください。

(2)抄録原稿

- ・抄録原稿締切：一般発表もポスター発表も1998年1月30日(消印有効)までに抄録原稿を上記送付先にお送りください。
- ・抄録原稿の体裁：抄録原稿は、和文で作成してください。印刷製本のため、抄録は、ワープロ等で作成し、論題、発表者名、所属を原稿の冒頭にお入れください。また、英文の論題、発表者名、所属をそれぞれの項目の下に付記するようお願いいたします。一題につき、B5版用紙2枚、40字×40行(論題、発表者名、所属を含む)、上下左右の余白マージン15mm以上、横書きでお願いします。
- ・抄録原稿を送付する際には、印刷した原稿と共にフロッピーディスク(ラベルに使用機種名およびソフト名を記入してください)をお送りください。

(3)一般発表について

- ・一般発表は、大会2日目3月27日の午前中と午後に予定しています。発表時間は、15分(発表時間20分、討論時間10分)を予定しています。

- ・ポスター発表は、大会1日目(3月26日)の12時から13時30分の間に予定しています。発表者は、その間、展示パネルの前に立ち(椅子を用意します)、参加者からの質問に答え、コミュニケーションを深めてください。発表資料を個々に配布してもかまいません。
- ・発表者は、セッション開始5分前までに、発表会場の指定された番号のパネルにポスターを貼ってください。展示パネルの上部には、論題、発表者名、所属を表示してありますので、該当するパネルをご使用ください。
- ・ポスターの大きさは、縦158cm×横109cm(模造紙2枚分)です。文字等の大きさは特に指定しませんが、ポスターから約2m離れた位置でも読める大きさを目安にしてください。
- ・発表者は、大会プログラムで指定された在籍責任時間の間、質疑応答に応じてください。

#### 7. 文献資料コーナー

大会事務局では、学会期間中に文献資料コーナーを開設いたします。当コーナーにて有料販売や無料配布および展示されたいお手持ちの文献資料(書籍、報告書、別刷、レポートなど)がございましたら、学会第1日目受付開始時間10分前(11時50分)までに事務局までご持参ください。事前に図書等の郵送を希望する場合には、自費にて事務局宛にご郵送ください。当日、大会事務局員が販売・配布を代行いたします。有料販売を希望される場合には、その文献資料等の販売価格を合わせてご連絡ください。また、文献資料の有料販売や無料配布および展示を希望する方は、大会参加・研究発表申込書の該当欄にご記入ください。

#### 8. 宿泊案内

大会事務局では、下記旅行代理店に宿泊の便宜を依頼しました。宿泊を希望される方は、下記までお問い合わせください。大会期間中は混雑も予想されますので、お早めのお申し込みをお願いいたします。特に航空券は、2ヶ月前の発売となりますので、それ以前にお申し込みください。

JTB教育旅行神戸支店

〒650 神戸市中央区三宮町1-3-1 神戸富士銀ビル9階  
TEL (078) 391-6955 FAX (078) 391-1143  
担当者 立浪智子、青木啓

#### 9. 大会組織委員会事務局および連絡先

神吉賢一(委員長)  
山口泰雄(事務局長)  
天野郡壽(幹事)  
齋藤健司(幹事)

#### ■ 日本スポーツ社会学会第7回大会公開シンポジウム

- ・テーマ: 「転換期のスポーツと社会—制度疲労、社会問題、展望—」  
Sport and Society in Transition: System Discrepancy,  
Social Problems, and Perspectives

#### ・趣旨:

わが国のスポーツ制度は、現在、転換期を迎えている。地域や学校、企業やプロスポーツ界においては、これまでのシステムが制度疲労に陥り、多様な問題が顕在化している。例えば、中学校のスポーツ部活動においては、少子化の影響により、集団スポーツの部員数が不足し、大会出場ができないところが出てきている。そこで、文部省の補助事業により、複数の中学校が集まる総合型地域スポーツクラブでチームを編成している地域があるが、中体連の規則である「1校1チーム登録制」により、中体連の大会には出場できない。

い。また、民間のスポーツクラブに所属し、活動を続けていながら、学校名で出場している種目も少なくない。

国体出場は日本国籍を持つことがルールになっており、在日外国人には出場の道が閉ざされている。また、競技スポーツの世界においては、プロ化が進み、バレーボールやバスケットボールにおいても、プロ選手が誕生している。プロ野球界においては、ここ数年、大リーグへの移籍問題が続いており、スポーツのグローバルライゼーションに伴う問題が生まれている。

スポーツ社会学は、これまでスポーツの世界におけるリアリティを記述し、現象を説明し、解釈を行ってきた。本シンポジウムは、転換期にあるスポーツの制度疲労を明らかにし、社会問題となっているメカニズムを浮き彫りにする。さらに、21世紀のスポーツの発展を目指して、制度疲労を乗り越えるビジョンを議論し、提起したい。

#### ・パネリスト:

森川貞夫(日本体育大学)  
「地域スポーツ・スポーツ部活・スポーツクラブ」  
野川春夫(鹿屋体育大学)  
「外国人選手・在日外国人選手・文化摩擦」  
金光千尋(オリックス・ブルーウェーブ球団専務)  
「プロスポーツ球団・移籍問題・地域貢献」

#### ・コーディネーター

山口泰雄(神戸大学)

## 日本スポーツ社会学会ホームページの開設について

10月1日より、日本スポーツ社会学会のホームページを開設しました。アドレスは、<http://sport.kyokyo-u.ac.jp/jsss/jssshp.htm> です。こんなページを開いて欲しいとか、こんなところにリンクしてはどうかとか、皆様のご意見で、よりよいホームページにしていきたいと考えております。是非、ご覧になった感想やご意見を、ホームページ運営委員会(sugimoto@wsml.kyokyo-u.ac.jp)まで、お寄せ下さい。

### 日本スポーツ社会学会

### JAPAN SOCIETY OF SPORT SOCIOLOGY

#### ようこそ 日本スポーツ社会学会ホームページへ

日本スポーツ社会学会は1991年3月に発足しました。今や、スポーツはわれわれの生活と切っても切れない関係にあります。健康のためにするスポーツから、オリンピックやワールドカップといったトップアスリートのスポーツまで、幅広い活動としてスポーツは存在します。また、メディアを通して、「見るスポーツ」は、世界的な規模で広がっています。さらに、ファッションと結びついて「着るスポーツ」や、スポーツ映画やスポーツ漫画といった他の文化とも融合していきます。このような社会現象としてのスポーツを、社会的に読み解くことが、本学会の目的です。

- ・最新情報
- ・理事の紹介(1997-98年度)
- ・学会の沿革史(1991-96年度)
- ・本年度の学会(1997年度)
- ・事務局から(入会の手続き等)
- ・スポーツ社会学研究について
- ・スポーツ社会学メーリングリスト(SosNet)について

#### ・関連学会へのリンク

北米スポーツ社会学会(NASSS)

## 研究委員会からのお知らせ

新しい研究委員会の活動方針を以下のようにまとめました。積極的なご意見・ご提案を会員のみなさんから広くうかがわせていただければと思います。

### 1.これまでの学会の研究活動と委員会活動の若干の「総括」

日本スポーツ社会学会は1991年3月に発足、記念集会・学会大会を重ねてすでに6年間を経過した。この間、学会研究誌『スポーツ社会学研究』は5号まで発刊、「ニューズレター」紙上における研究紹介・書評・いくつかの論争(コメントおよびリプライ)などが行われている。こうした研究活動に委員会がすべて関与してきたわけではないが、学会としての研究活動は極めて旺盛と「自画自賛」してもいい状況ではないかと思われるがどうか。

しかし、来るべき21世紀を目前にし、かつ学会創立10周年を迎えるにあたって一層の学会及び会員の研究活動の発展を願う立場から、これまでの研究活動についての「反省」と今後の課題を明らかにしていくことが必要ではないかと思われる。そこで新しい研究委員会のスタートに際して新旧委員会(会長にも参加をお願いした)のメンバーに集まってもらって話し合いの場をもった。以下はその時に出た話を素材に若干の整理・修正を加えたものである。

- (1)学会の社会的認知の拡大と会員の研究活動の条件確保のために
  - 1.日本学術会議への登録申請の条件ができてきたので申請をしたい。
  - 2.国際シンポジウムなどへの外国人研究者の招待のために文部省の科学研究費の申請をしたが、これまではいずれも駄目であった。
  - 3.今年の第6回大会の国際シンポジウムの英語版報告書を図書の形で出版したいので出版刊行助成費の申請を進めたい。
  - 4.今回の国際シンポジウムの準備活動を通して日本社会学会、ICSS、新聞社、出版社等へ宣伝・広報活動を行い、かなりのネットワークが広がったのは今までにない成果である。同様に、韓国、フランス、イギリスなどの学会組織・研究者個人の連携もできてきた。
- (2)学会の研究活動の状況について
  - 1.昨年と今年の2年連続で学会大会では研究委員会主導により「スポーツ社会学の理論的可能性を探る」をテーマにして活動を行ってきたが、このことの評価をどのように行うかが問題である。
  - 2.院生や若手研究者などにはかなり刺激的であったという(高い)評価もある一方で、「これではついていけない」という部分もあった。これをつなぐ「軍団」を組織する必要があるのではないか。
  - 3.これは単なる世代間格差とみるよりは、スポーツ社会学の学問的性格からくるもので、理論的な方向と実証的な方向の対立、あるいは「臨床社会学」といった側面からの欲求不満もあるのではないか。
  - 4.スポーツ社会学が取り上げるべきテーマは幅広く、かつ方法論・価値観も多様であることをさらに考慮するならば、学会大会や学会誌の運営・運用などの改善を通して、できるだけ多様な立場・方法論・テーマを受け入れて一層「興味ある」「魅力ある」ものにしていく努力をつづけていくことが期待されよう。

### 2.第4期日本スポーツ社会学会の研究活動の推進のために

- (1)学会員の研究条件の確保と学会の研究活動体制の推進のために
  - 1.科学研究費の配分枠の拡大のために社会学会と体育学会の両組織に働きかける。
  - 2.できるだけ早く日本学術会議に申請登録し、スポーツ社会学会としての認知を受ける。
  - 3.「ニューズレター(たより)」の発行に協力して会員のコミュニケーション・情報ネットワークを広げていく。
- (2)つみかさねのある研究活動の推進とスポーツ社会学研究の多様な発展のために
  - 1.21世紀を前にして日本におけるスポーツ社会学研究の課題を明らかにしていくための特別の活動を組織していく必要があるのではないか。具体的には特別プロジェクトや課題・テーマ別分科会を用意し、何年間か継続して討議・検討していきける体制をつくる。
  - 2.すでにある地域スポーツ社会学研究会(例えば関西スポーツ社会学研究会)などになって、日常的な研究活動を組織していく必要があるのではないか。
  - 3.学会創立10周年(2001年)を目標に日本スポーツ社会学会編『現代スポーツ社会学体系』を刊行する準備を進めながら、同時に多様な立場・方法論、テーマを整理していく作業を進める。当面は日本社会学会編の『現代社会学入門』(有斐閣)になって『現代スポーツ社会学入門』を刊行する。
  - 4.「スポーツ社会学をどのように教えるか」の特別セッションを設け、大学改革というサバイバルゲームの中でどう対応しているかを出し合う。
- (3)当面の課題
  - 1.第7回学会大会(1997.3.26/27、神戸大学)を成功させる。  
すでに神戸大学山口会員を中心に現地実行委員会が組織され、原案ができていて、近いうちに会員宛に案内が送付される。シンポジウムやポスター発表、ミニシンポ、国際(アジア)セッションなどの工夫がなされている。
  - 2.次回大会に向けて「課題研究」「宿題研究」などのテーマ、プロジェクトを起していく。
  - 3.広く学会員の関心・要望をとらえるための会員アンケートを行う。

- 「課題研究」「宿題研究」などのテーマならびにプロジェクト活動について、ご意見・ご提案を広くうかがいたいと思います。お気軽に、事務局または森川のところまでお知らせください。

## 編集委員会からのお知らせ

- 1) 去る9月6日編集委員会を開催しました。議題は次の通りです。
  - a. 投稿論文等の受理について
  - b. 査読専門委員の依頼原案について
  - c. その他上記の委員会で受理し査読をお願いすることに決定した投稿論文等は、昨年・一昨年に比較してやや増加しました。委員会原案に基づき査読をご依頼した専門委員からは幸いです。投稿下さった会員の方々、ならびにご多用中にもかかわらず査読の労をお取り下さった専門委員の皆様にお礼申し上げます。
- 2) 上記の編集委員会において決定された事項のうち、今後参考にさせていただきたい問題点に限って内容をご案内いたします。
  - a. 海外から投稿される場合、「会報」でお知らせする原稿などの締切日は、当該国の同日付け消印と解釈いたします。(例をあげれば、ヨーロッパ、合衆国など、多くの場合日本時間から見て1日遅れになると思います)。
  - b. もちろんそれ以外の投稿規定に定める事項もまったく同様に適用されます。たまたま海外から投稿する必要がある場合は、どうぞ投稿規定に一層十分な留意をお願いします。
  - c. それ以外の研究誌関係の業務は、従来の慣例通りです。個々に運用上の変更がある場合は「会報」でお知らせしますので、どうぞ「会報」ならびに「投稿規定」を十分にご参照下さい。
- 3) 次回編集委員会は10月4日に開催する予定です。議題は査読結果に基づく投稿原稿の取り扱いに関する問題、その他です。

## 事務局からのお知らせ

前回の第17号でもお知らせしましたとおり、「会報」の編集方針として「速報性のある情報交換の場」という側面を重視しております。そこで会員みなさまに、「研究通信」「図書紹介」「掲示板」「研究会/講演会」等、研究情報をお知らせいただき、活発に本会報を利用いただければと思います。つきましては、電子メール、ファックス、郵送にて、会報担当(大手前女子大学、松田)まで以前にもましてどしどし情報提供、投稿をいただければ幸いです。その場合の連絡、送付先は以下の通りです。お待ちしております。

住所：〒662 兵庫県西宮市御茶家所町6-42

大手前女子大学文学部教養科教職課程 松田恵示 宛

## 理事会の記録

第4期 第2回 (1997/9/28 於 大手前女子学園)

参加理事:井上俊(会長)、宮内孝知(理事長)、平野秀秋、森川貞夫、山口泰雄、山下高行、杉本厚夫、江刺正吾、菊幸一、リー・トンプソン、(ob.)松田恵示

### ○報告事項

1. 編集委員会の報告  
平野委員長より「スポーツ社会学研究 第6巻」の投稿・編集作業状況、ならびに海外からの投稿等に関する検討事項について報告がなされこれが了承された(編集委員会報告参照)。
2. 研究委員会の報告  
森川委員長より今期研究委員会の活動方針が報告され了承された(研究委員会報告参照)。
3. 渉外担当の報告  
菊理事よりICSSから学会大会の案内(本会報に掲載)が届いていることが報告された。
4. 事務局の報告  
菊理事より会計の収支、ならびに庶務的状况について報告された。

### ○審議事項

1. 会費滞納者の取り扱いについて  
会則第8条(会員の退会に関する規定)の執行について意見が交され、会費の滞納が2年間に及んだ会員に対して事務局より通知し、その後さらに会費納入がなされない場合退会扱いとすることが了承された。
2. 新入会員の取り扱いについて  
会則第5条(会員の種別に関する規定)、第7条(会費に関する規定)に関わる新入会員の取り扱いについて検討が行われ、事務局による適切な運用をさらに図ることが了承された。なお、若干の文言の修正について、理事長が原案を作成し、次回理事会で審議し、総会の議題とすることにした。
3. 理事定数の取り扱いについて  
第6回総会において検討事項として指摘された理事定数について、役員選出細則第7条(理事定数)、第11条(役員の任期)に基づき、現行の理事定数が適正であることを確認した。
4. 会員の慶弔事項の取り扱いについて  
会員の慶弔事項について意見が交換され、内規により取り扱う方向で検討を進めることが了承された。なお、具体的な内容については、次回理事会までに理事長が原案を作成し、次回理事会で審議することとした。また、今年度の慶弔費については予備費より支出することが了承された。

## 5. ホームページの開設と今後の取り扱いについて

日本スポーツ社会学会のホームページ開設と初期の内容、ならびにホームページの運営に関して「日本スポーツ社会学会ホームページ運営委員会」の設置と委員会規定について提案があり、検討のうえ了承された。また、この規定に基づきホームページ運営委員会委員長に杉本理事を選出した。

## 6. 第7回学会大会について

大会校の神戸大学、山口理事より大会プログラムの原案が提出され検討が行われた。

## 図書紹介

### 『アメリカスポーツと社会—批判的洞察—』

(G.H.セージ著 深澤 宏訳 不昧堂出版 1997年 定価3000円)

本書の原題は、現国際スポーツ社会学会副会長、ジョージ・セージ著「アメリカスポーツの権力性とイデオロギー：批判的洞察」Power and Ideology in American Sport - A Critical Perspective-」である。

日本語版への序文の中で、セージは批判的論理洞察法とは「スポーツを含めた社会制度や文化的活動を形作っている権力性やイデオロギーを非神話化し、その形成過程に焦点を当てる」ことだとし、このような洞察が「宣伝、圧制、社会的偏見をあばくのに有効」であることを指摘している。さらに、もっと重要なこととして、「この方法が、社会的正義の立場から、人々に自分たちの社会を変革するよう導き、変革の力を与える目的をもってのこと」であると述べている。

スポーツの「グローバルイゼーション」が日常化する中で、これらの現象すべてが、生産、分配、消費という政治・経済学の重要な要素を備えている。スポーツにおける世界化の発展は、資本主義の4つの基本的特徴と一致すると言う。すなわち、商品とサービスを売る新しい市場、原料(スポーツ、ゲームなど)、安い労働力、仕事を求める労働者の移住である。このような現象は、韓国・日本とのサッカーのワールドカップ開催、Jリーグ、サッカーくじ、パキスタンの子供達が1日、70セントでサッカーのボールやシューズを作らされている事実、野茂選手の移籍等から、具体的に見ることが出来る。

本書は、社会とスポーツとの深いつながりを批判的に考察し、現代スポーツに変わる新しいスポーツ(alternative sport)を模索するためにも必要な書籍となる。

本書を「スポーツ社会学」の講義でテキストに使い、各学生にレジюмеを作らせ発表形式で授業を行ったところ、「スポーツがこんなに社会、政治、経済と結びついているとは、知らなかった、、、」というような感想もあり、学部学生はもとより、大学院の講義でも有効と考える。

### 内容(目次)

#### 日本語版への序文

#### 序論

- 1章 スポーツの社会的見方
- 2章 社会的イメージとスポーツ
- 3章 階級、性、社会階層とスポーツ
- 4章 スポーツと国家：アメリカスポーツの政治経済学
- 5章 スポーツの商業化
- 6章 マスメディアとスポーツ：管理されるイメージ、印象、イデオロギー
- 7章 プロチームスポーツ産業
- 8章 大学スポーツの権力性とイデオロギー
- 9章 スポーツを通しての人格形成

## 10章 スポーツにおける抵抗と変革

訳者あとがき

索引

(深澤 宏)

### 『スポーツ社会学の理論と調査』

(多々納秀雄著 不昧堂出版 1997年)

本書は、去る平成7(1995)年9月9日に49歳という若さで急逝された、スポーツ社会学会の元理事・事務局長であった多々納秀雄氏の最初で最後の単行本である。また、135名の方々の據金(ご厚志)によって三回忌法要(1997年9月9日)に向けてつくられた鎮魂の書でもある。しかし、本書は、このような刊行の経緯とは別に、これまで数多くの業績を上げながらそれを遂に自身の手でまとめ上げることができなかった多々納氏のスポーツ社会学に対する理論的、実証的内容が、今後のスポーツ社会学の発展にとって十分に意義あるものであるとする関係者の思いから生まれたこともまた事実である。

したがって、刊行事業会では、本書の構成にあたって故人が生前メモ書きしていたご自身の博士論文の構成を参考にしながら、なるべく学生や研究者にとって幅広く参考になる論文内容を理論編と調査編に分けて取りまとめた。調査編で取り上げられた林の数量化理論やクラスター分析は、今日学部学生の卒論レベルのゼミに活用できるであろうし、理論編で取り上げた認識論、方法論、制度論、文化論などは、大学院生や研究者にとって従来のテキストを超えた、基礎的でありつつも深みのあるスポーツ社会学のテキストとして活用できると思われる。

なお、本書の印税収入がご遺族に支払われることでもあり、学会員の皆様のご協力をぜひお願いする次第です。

#### 第1部 スポーツ社会学の理論

- 第1章 スポーツ社会学における概念規定と方法論
  - 1 スポーツの概念規定をめぐる諸問題
  - 2 スポーツ社会学の方法論的課題
- 第2章 スポーツの文化論・制度論
  - 1 「文化としてのスポーツ」に関するモデル構成
  - 2 「制度としてのスポーツ」論の再検討
  - 3 「多元的現実としてのスポーツ」論の構成
  - 4 スポーツの社会的・文化的可能性とその課題
- 第3章 日本的スポーツ論
  - 1 「日本的スポーツ論」の認識論的・方法論的諸課題
  - 2 日本的スポーツの精神風土—「同じ釜の飯」考—
  - 3 日本的スポーツの生成・変容過程

#### 第2部 スポーツ社会学の調査

- 第4章 スポーツ参加の多変量解析
  - 数量化理論第 類による要因分析—
- 第5章 身体的健康のパターン分析と要因分析
- 第6章 大学体育・スポーツの国際比較
  - 第18回ユニバーシアード福岡大会の調査結果から—

(菊 幸一)

## 【生涯スポーツの社会学】

(厨 義弘監修/大谷善博・三本松正敏編 学術図書出版社 1997年)

人生80年代を迎えて、生涯学習社会の到来とその実現が叫ばれている。90年代に入って、“生涯学習”や“世紀末”、“21世紀”等を組み合わせてタイトルにした論説や著書を数多く見受けられるようになった。しかし、それらの中にはタイトルで印象づけて、注目や関心を惹こうとするものが必ずしも少なくはなかった。

今、まさに21世紀を目前にひかえ、先行き不透明な混迷する時代状況の中で、“時代を読むキー・コンセプト”となりつつある“スポーツ”をフレーム・ワークとして、言い換えれば“スポーツ”というレンズを通して社会をどのように分析し、社会現象をどのように読み説くのがスポーツ社会学の使命の1つとして自覚され始めている。

そのような意味で、生涯スポーツは、生涯学習社会の実現を目指している今日の社会において、生の充実と自己実現を目指すライフスタイルの確立に寄与しうるのであるのか、それとも“生涯スポーツの実践”や“生涯スポーツ振興”という言葉の背後には、隠された政策的な意図や思惑が秘められているのか。

本書は、このような現実的、社会的、文化的等の諸問題に対して真正面から取り組み、生涯スポーツを多様な視点から鳥瞰しながら、才気ある若手研究者が中心となってその英知を結集して、生涯スポーツの問題領域に新たな地平を切り拓こうとする意欲的な論文集である。

本書の構成と執筆者は以下のとおりである。

- まえがき 厨 義弘 (筑紫女学園大学)
- 序 わが国における生涯スポーツの展開と地域における振興の条件 厨 義弘 (筑紫女学園大学)
- 第1部 生涯スポーツ論の展開
1. 生涯学習社会とスポーツ  
—スポーツ・イベントの意義と可能性をめぐって— 三本松正敏 (福岡教育大学)
  2. 生涯スポーツ体系の構造と変動—日英比較を中心に— 菊 幸一 (奈良女子大学)
  3. 生涯スポーツの意味再考—現代社会とスポーツの可能性— 山本教人 (九州大学健康科学センター)
- 第2部 生涯スポーツ振興におけるイノベーション
1. 生涯スポーツ施設とイベントスポーツ施設の接点  
—スポーツ施設にもっと軽やかさを— 上和田茂 (九州産業大学)
  2. 生涯スポーツの振興戦略と公共スポーツ施設のマーケティング  
—地域スポーツ振興拠点施設のインタラクティブ・マーケティングの実現を目指して— 中西純司 (福岡教育大学)
  3. 生涯スポーツ社会における指導者システムの再構築  
—スポーツ・レクリエーション指導者のプロフェッション化(専門職化)と資格問題— 松尾哲矢 (福岡大学)
  4. 生涯スポーツ時代のスポーツ革命  
—山・川・海と共生するグリーン・スポーツ— 小谷 寛二 (呉大学)
  5. 障害者の生涯スポーツ・レクリエーション  
—その実態と振興方策— 大谷善博 (福岡大学)  
谷口勇一 (福岡大学)
- 第3部 生涯スポーツへのプロセス
1. 大衆スポーツの展開とその背景—戦後50年の素描— 金崎良三 (佐賀大学)
  2. 生涯スポーツ社会にいたる過程  
—福岡市のスポーツ振興施策を通して— 千代島陸利 (財)福岡市スポーツ振興事業団)  
佐藤靖典 (福岡市市民局文化スポーツ部)

## 第4部 生涯スポーツの実態レポート

1. 過疎化に悩む山口県豊北町の事例から 安富俊雄 (梅光女学院大学)
2. 高齢者の生涯スポーツ実践を配慮した地域の取り組み  
—大分県宇佐市の実態調査の結果から— 梅田靖次郎 (西日本工業大学)

あとがき

三本松正敏 (福岡教育大学)

(三本松正敏)

## 掲示板

### ●「アジアスポーツ社会学会」のご案内

影山、森川会員から、下記のような国際学会のお知らせとともに、会員のみなさまへの学会参加のおさそいがありました。学会の概要は次のとおりです。

- ・メインテーマ  
『21世紀におけるアジアのスポーツ：社会発展とスポーツ』
- ・開催期日  
1997年 11月23日～26日
- ・会場  
北京体育大学
- ・公式用語  
英語または中国語
- ・発表申し込み締め切り  
9月15日
- ・会費  
宿泊費など全部含めて1日90\$

参加のご意向のある会員の方は、あらかじめ影山会員か森川会員の方へお知らせください。

影山 健 (愛知教育大学名誉教授) 電話：0564-52-1102  
ファックス：0564-53-2654

### ●「国際スポーツ社会学会」のご案内

第17号のこの会報でも J. Sage より紹介がありました国際スポーツ社会学会と来

年の学会大会について、ご案内します。

#### 1 学会への参加と発表・投稿のお願い

国際スポーツ社会学会 (ISSA) は1996年から、それまで約30年継続してきた国際スポーツ社会学研究委員会 (ICSS) から生まれ変わり、国際学会として発足したばかりです。現在は英国の J. Maguire が会長です。現在会員は30カ国約150名、日本からは約25名の参加があります。学会の活動は、年4冊の機関誌・国際スポーツ社会学評論 (IRSS) と2冊の会報、それから年1回のシンポジウムの開催等を行っています。1997年からIRSSの発行が英国の Sage 出版社に変わったのを機会に、同学会への参加申し込みも年会費の送金 (国際カードで支払える) もこの出版社が扱うようになりました。そして学会活動を盛り上げるために、理事会で日本からも積極的参加と、機関誌への投稿を促すよう、要請を受けております。この機会を利用して再度日本スポーツ社会学会の会員の皆様に、ISSAへの参加と発表並びに機関誌への投稿を強くお願いしたいと思います。出来るだけ多くの研究者の参加を促すため、機関誌IRSSには、日本語、韓国語、中国をはじめ世界6カ国語の要約をつけております。効果のほどは不明ですが、現在この日本語への翻訳を私がやっています。どなたかボランティアがいらっしゃいましたら大いに助かります。ご連絡ください。会員がわずか150名、年会費6000円足らずの弱小学会を何とか皆さんの手で盛り立てていただきたい、思う次第です。ISSAとIRSSの案内状兼申し込み用紙は奈良女子大の学会事務局あるいは私のところにありますので、ご連絡ください。申し込みは、すべて国際ファックスでやれます。

#### 2 1998年国際社会学会および国際スポーツ社会学会大会の案内

1998年7月26日から8月1日まで、カナダ・モントリオールで上記の国際スポーツ社会学会のシンポジウム (主テーマは、“スポーツ社会学的知—遺産、挑戦、展望”) が開かれます。今年は4年に1回、開催される国際社会学会 (ISA) の世界大会 (主テーマは、“社会学的知—遺産、挑戦、展望”) と共同開催の年で、世界中から約5,000人の社会学者が集まります。約40のセッションが開かれ、午後に何日間か開かれるスポーツ社会学もその1つのセッションで、午前中は他の社会学分野にも参加できます。

- ・ 発表申し込みのためのアブストラクト提出締め切りは、1997年11月30日。
- ・ 大会参加の申し込み締め切りは1998年3月31日。
- ・ このほか詳細については、インターネットの社会学会大会のホームページをご覧ください。 (<http://www.bcoc.umontreal.ca>) です。私のところにも簡単な説明書がありますので必要ならば、ご連絡ください。

小椋博 (香川大学) 電話/ファックス: 0878-36-1983  
E-mail: komuku@ed.kagawa-u.ac.jp

# ISSA

International Sociology  
of Sport Association  
Association Internationale  
de Sociologie du Sport

## 1998 Conference

# CALL FOR PAPERS

ISSA Annual Conference  
to be held in conjunction with the  
14th World Congress of Sociology  
July 26th - August 1st 1998  
Montreal, Quebec, CANADA

Conference Theme:

**Sociological Knowledges of Sport:  
Heritage, Challenges, Perspectives**

---

## 新入会員

---

・太田 義孝  
所属：ロンドン大学大学院

・伊藤 克広  
所属：京都教育大学大学院

---

## 住所・所属変更

---

・高見 彰  
・秋本 信孝  
所属：千葉県立葛南工業高校

---

## 訃報

---



大阪教育大学教育学部保健体育教育講座教授  
島崎 仁氏 (享年54歳)

◆

島崎会員は、平成9年7月19日肺炎のため大阪市立大学医学部附属病院において逝去されました。島崎氏は、体育・スポーツ社会学と保健体育科教育学の研究教育に努められ、連字符社会学としての研究法の検討からスポーツ社会学と体育社会学の基本的な相違を分析したわが国最初期のスポーツ社会学論を始め、生涯スポーツ論、スポーツ文化論、スポーツ行政研究等、教育とスポーツに関する社会学的・人間学的研究を推進されていました。また、保健体育審議会特別委員を始め、文部省大学設置審議会専門委員、文部省学習指導要領作成委員等、わが国の学校体育行政/スポーツ行政の根幹にかかわる重職を歴任され大きな功績を残されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。

◆

追悼文 「島崎さんと多々納君とわたしと」

滋賀大学教育学部 沢田和明

多々納君の3回忌を待たずしての島崎さんの訃報は、英雄待望論で学問への省力化を決め込む私にとって酷しすぎた。多々納君の「沢田さん、たまには本を読まなくっちゃ」と、島崎さんの「沢田君、これからの時代は君達を必要としている」という何度か聞かされたそれらの言葉は、それぞれの急逝を暗示する謎かけだったのであろうか。

葬儀での「もう島崎節が聞けないなあ」という杉山先生の弔辞を聞きながら、亡くなるほんの数日前に送っていただいた「保体審中間まとめコピーの落丁部分再送ファックス」(7月15日13:34発)での「暑さに向います。御自愛のほど」が私への最期のことばになったことを実感した。コピー郵送依頼時の電話で、「なかなか僕のいうことが解ってもらえなくてねえ。でも頑張るしかないから…」と話されていた。病体に鞭打ち、文字通り命を削りながらの答申の一字一句の背景を噛みしめながら、島崎さん亡き後、学校体育や生涯スポーツの後退することがないように、努力嫌いの私が心新たにしている。

もう30年ほど前の東京。学部3年時の大学院生の島崎さんと一緒に不思議な演習に始まり、健康優良児運動能力テスト実施時のあざやかな砂場ならしに目をみはり、教務補佐時代の「いろんな」話、竹之下先生とのケルン大学の国際比較調査実施や学会発表の資料作成、文部省での苦労話まで…。小椋君がいて、先輩、後輩がいて…。20年前関西にきてからの関西体育社会学会、大阪教育大学での研究会…そういえば私のゴルフコース初体験も島崎さんと…。

近年「満身創痍」にありながら、天下の情勢の読みの適切さと深さ、学問的裏付けのある説得力は、まさに「島崎節ここにあり」であった。また、ビール1-2杯で十分語り合い、酒の席を積極的に楽しみ、酒乱とうまくつきあっていく特技は昔から変わることがなかった。

行政と学問のあり方を前向きに問い続け方向付けを模索し続けた島崎さん、とにかく多読で博学な多々納君。学問への熱い想いと手抜きを絶対に許さない几帳面さをもった二人と、学問を離れ、気まぐれな思いつきや情感の世界に埋没し、常に自分に甘く、また、酩酊し終電後京都駅から石山駅までの5時間余りの夜間歩行もする私とは妙に対照的であった。怠け者で愚鈍な私は相変わらず惰眠を貪り夢の中で「かなわぬ夢」を追い続けている。

「島崎さんと多々納君とわたしと」が、それぞれが未来から預かった大切な子ども達を責任を持って未来にお返しする「教育」ということとの関わりで、それぞれが一番いいと思いついてきた道であることを信じている。死後の影響力がさらに一層強くなってきていることを実感しながら…。「みんなちがって、みんないい」と結んでいる金子みすずの詩を勝手に解釈しながら…。

島崎さんとの素晴らしい出会いに感謝。出会いを素晴らしいものにできた多くの出会いに感謝。合掌。

「亡き人と 語り明かさん 菊の酒」

## 編集後記

第18号をお届けします。会報編集の作業もいまだしっくりせず、ミスも多いのではと内心ヒヤヒヤですが、会員みなさまのお力をお借りしながら、有益な情報交換の場となりますよう鋭意作業を進めたいと思います。

ところで、会報中の記事にもありましたように、島崎先生が54歳の若さにして亡くなりました。社会学のみならず、考えることの面白さを教えていただいた恩師だけに、心に開いた穴は当分埋まりそうにもありません。「汗をかくだけがスポーツじゃないよ。スポーツはもっと豊かで奥深い、人間にとって大切な文化なんだよ」という先生の口癖に、これからどれほど答えていけるのか、自問自答しながらの研究活動になりそうです。

(K.M)

## 日本スポーツ社会学会会報 第18号

平成9年 10月24日発行  
発行：日本スポーツ社会学会事務局  
(奈良女子大学文学部内)

●学会への連絡、および入退会、住所・所属変更、会費納入、その他各種手続きに関しては以下までお願いいたします。

日本スポーツ社会学会事務局  
〒630奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部内  
事務局長：江刺 正吾

庶務・会計：菊 幸一

郵便振替口座番号：00390-0-43962  
加入者名：日本スポーツ社会学会事務局

●会報への投稿に関しては以下までお願いいたします。

〒662 西宮市御茶家所町6-42  
大手前女子大学教養科教職課程 松田恵示 宛

## スポーツ・レジャー社会学 オールターナティブの現在

デービッド・ジュリー／ジョン・ホーン

清野正義／山下高行／橋本純一 編著／A 5版334頁、本体2816円

——今日、私たちの生活のなかで、スポーツやレジャーの占める比重が圧倒的に高まってきている。生活世界におけるスポーツ・レジャーの位置や意味を多方面から分析し理論構築を図ることは、日本はもとより、世界的にもみて社会学上の課題となっている。それは、多様な意味と重層的構造を持つに至っている現代社会におけるスポーツ・レジャーの分析のために、より一層深められた理論ツールを持つ必要が生じてきているからに他ならない。

本著での私たちの試みもこのような流れのなかに位置している。イギリスの気鋭の社会学者、デービッド・ジュリー、ジョン・ホーン両教授を迎え、日英の研究者によるイギリス、フランスを中心としたヨーロッパの理論社会学の批判的検討という共同作業を通じて、スポーツ・レジャーに関する分析の深まりと理論構築の新たな展開をめざしたものである。

(「編者あとがき」より)

### [主目次]

- 序章 イギリス・スポーツ・レジャー社会学と日本の研究／山下高行・清野正義  
I ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズとスポーツ・レジャー研究／ジョン・ホーン  
II ヘゲモニー論とスポーツ社会学研究  
III ビエール・ブルデュールとフランス・スポーツ社会学  
IV スポーツとレジャー研究におけるフィギュアレーション社会学再論  
／デービッド・ジュリー&ジョン・ホーン  
V 「企業社会」日本のレジャーとスポーツ／川口晋一  
VI 労働時間、スポーツ、空間／清野正義  
終章 スポーツ・レジャー社会学における理論および方法論の新たな方向性  
／デービッド・ジュリー&ジョン・ホーン

## カウンセリングにおける カウンセラーの経験 クライエントの経験

中村喜久子・中原射鹿止 著 四六判 210頁 本体 1800円

——カウンセリングにおいては、カウンセラーが何をどうしたかではなく、クライアントが何をどのように経験したかが重要である。にもかかわらず、これまでの著作はカウンセラーの立場からの一方的な発表ばかりであった。本書はクライアントの全面的協力を得て、クライアント、カウンセラー双方の実践記録を収録。

「何をするにも自信をなくしてしまい、仕事をするにも常に不安がつきまとう。」辛い毎日に苦しんだ数年間を経て、元気な生活を取り戻し「自分らしさ」を実感するようになったクライアント。2年7か月、100回に及ぶカウンセリングは、カウンセラーとクライアントが共に歩んだ生還へ向かっての道程でもある。その足跡を克明に辿る。

### [主目次]

- 第一章 中原氏とのカウンセリング——カウンセラーの経験 (中村喜久子)  
第二章 クライエントの私 (中原射鹿止)

〒171 東京都豊島区高松 2-8-6

道 和 書 院

TEL (03)  
FAX

杉本厚夫編

# スポーツマンシップの社会学

四六判／二七八頁／一八九三元

スペクテイターとしての「スポーツファン」、メディアによって作り出される「スポーツファン」とは一体何なのか。「見るスポーツ」に焦点を当て、ファンティックにスポーツを愛する人々について考察した注目の書

ジャネット・リーヴァー著 亀山佳明・西山けい子訳

# サッカー狂の社会学

四六判／三三三頁／二二三三元

●ブラジルの社会とスポーツ  
世界最大のスポーツ・スペクタクル・イベント、ワールドカップ(W杯)を四度にわたって制覇したブラジル。その強さは何に由来するのだろうか。この疑問に社会学という視点から応えようとした貴重な一冊

新 睦人編

# 比較文化の地平

四六判／二六〇頁／二二〇〇円

●日本とヨーロッパ  
長年にわたり互いに影響を与えあってきた日本とヨーロッパの文化は、どのような様相を示してきたのか。社会、宗教、教育、スポーツなど、多様な視点から、現在に至るまでの両者の文化のありようを探る

渡辺和子編

# アメリカ研究ウィズンダー

四六判／四三〇頁／二八〇〇円

女性の視点で「アメリカ研究」を変える——女／フェミニズム／マルチ・カルチュラリズムの立場から合州国の歴史、政治、経済、法律からさまざまな文化活動まで取り上げた、総合的・学際的入門書

1893円

## 高校野球の社会学

●甲子園を読む 文化社会学的な視点から高校野球を考察し、甲子園「神話」の深層に迫る

2427円

## フロー体験 喜びの現象学

幸福、喜び、楽しさ、最適経験などの現象学的課題の本質を多様な視点から解明した労作

3786円

## パブリック・スクールの社会学

●英国エリート教育の内幕 生徒、教師、寮母らの喜怒哀楽とサバイバル戦略を生き生きと描出

1893円

## スポーツ文化の変容

●多様化と画一化の文化秩序 文化装置としてのスポーツが発信するメッセージを読み解いた労作

1631円

## スポーツの社会学

プロ野球、マラソン、ゴルフ、相撲等を通して、新たな視点からスポーツの「意味」をさぐる

1893円

## 現代文化を学ぶ人のために

「都市、消費、情報、国際化」という基本的視点のもとに、多彩なテーマを通して現代文化を解説

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56  
☎075(721)6506<消費税別>